



2014年5月5日(月・祝) Bunkamura ザ・ミュージアム「ミラノ ポルディ・ペッツォーリ美術館 華麗なる貴族コレクション」へ行ってまいりました。現代人が珠玉の名作を目にすることが出来るのは、藝術を愛する貴族の「ステータスの証」としての製作依頼と、収集・保護の恩恵といえるでしょう。



本展はジャン・ジャコモ・ポルディ・ペッツォーリ氏(Gian Giacomo Poldi Pezzoli 1822~1879)コレクションから 80 点の来日。

美術館初代館長に指名されたのは、氏の肖像画(左)を描いたジュゼッペ・ベルティーニ氏。以来、館長はミラノ市長が指名することになっている。全くの個人コレクションなのに、市を挙げて応援している珍しいケースだ。武器・甲冑から始めたコレクションは、戦災で焼失したものもあるが 1020 点あるそうだ。この肖像画は本人死後に描かれたもので、白いシャツ・ネクタイは 1830 年頃からの流行。生前お気に入りだった 1870 年代普及の襟のスーツで描かれている。

ペッツォーリ氏の寝室を描いたのは、室内表現で最高評価を受けていたルイージ・ビージ氏、武器・甲冑展示室のデザインは、スカラ座舞台美術家だったフィリッポ・ペローニ氏と、最高の手腕が選ばれた。

武器には主に植物文様、楯にはルネサンス期の楽器の文様も見られる。またそれらは現物保存のみにとどまらず、パオロ・リッカルディ氏による水彩画としても残された。

ミラノといえばレオナルド・ダ・ヴィンチ。彼の作風を受け継いだ画家の絵が多い。

タペストリーは上方に戦いの図、下方にロマンス、というように、時系列の違うものが組み合わさっている。FRANCISCVS.SPIRINGIVS.FECIT・ANNO・JGO2・Sa という文字も織り込まれていた。



←グリゼルダの物語の画家《アルテミジア》(左)とベルゴニョーネ《アレクサンドリアの聖カタリナ》(右)

それぞれ別の年に別の人が描いたものであるが、ペッツォーリ氏はそれを対にして飾った。それも個人コレクションならではの配置だ。

→命をかけて救った愛しい人には恋人がいたので、恋を諦めたというレベッカは、その健気を称賛され、絵の題材としてよく描かれる。



《レベッカ》  
ジュゼッペ・モルテーニ



←ポルディ・ペッツォーリ美術館の顔ともいえるピエロ・デル・ポッライウオーロ《貴婦人の肖像》1470 年頃。

ネックレスのルビーは原石のまま。真珠は純潔、ルビーは愛の情熱の証で、婚約者に贈られた。

この当時の女性画というと、結婚が題材であった。ヴェネツィアでは 16 世紀前半には花嫁を描いて花婿に贈るという習慣があり、女性の衣裳の赤と白は愛を示す組合せだった。そのように女性の身に付ける物が愛の証を意味した。

その他、15 世紀半ばにはクリスタルガラスができたが、それを藝術品として生かせる技術はヴェネツィアにしかなかった。



←サンドロ・ボッティチェリ《死せるキリストへの哀悼》1510 年頃。最晩年の作品。メディチ家の庇護のもと、華やかな画風を展開したボッティチェリであったが、15 世紀末のフィレンツェでは、ドメニコ会修道士、サヴォローラの禁欲的説教に席捲され、信仰心を要求された。それが画風に表れている。

その他、『宮廷人』(バルダッサレ カスティリオーネ)の本が展示してあった。IL LIBRO DEL CORTEGIANO DEL CONTE BALDESSAR CASTIGLIONE Nuovamente riflampato. IN VENETIA, M.D.XLV と見開きの頁にあった。[バルダッサレ(Baldassare)カストリオーネ伯の廷臣の書 再版 ヴェネチア 1545 年?]